

無痛分娩についての説明と同意

無痛分娩とは、子宮の収縮や怒責感を残しながら痛みを軽減させるために行う、麻酔を併用したお産の総称です。当院で行っている無痛分娩は硬膜外麻酔という方法で、もっとも一般的な方法です。帝王切開でも使用される麻酔法で、下半身だけの局所麻酔のため意識もあります。無痛分娩といっても、痛みや怒責感を完全に消してしまうと陣痛もなくなってしまうため、帝王切開で使うよりは少量の麻酔薬で行います。したがって、まったくの無痛になるわけではありません。また麻酔薬の効き方には個人差があります。特に初産の方は通常の陣痛経験がないため、痛みの軽減に対する満足度も異なりますので、その点はご了承ください。

〔無痛分娩の方法〕

背中から細いチューブを挿入し、そこから痛み止めの薬（局所麻酔薬）を注入します。子宮収縮に伴う軽い陣痛はきますが、痛みは軽減されます。子宮口が全開したら、普通の分娩と同様に「いきみ」を行い出産します。この際、いきみがうまくいかないことがあり、分娩を助けるために吸引分娩を行うことがあります。麻酔薬は主に子宮より下の痛みを取り除きますので、意識ははっきりしています。足は少し重い感じがしますが、動かすことは可能です（個人差があります）。

麻酔薬を挿入後 10-15 分くらいしてから麻酔は効き始めます。麻酔の効き目については医師が確認します。麻酔薬により陣痛が弱まることもあり、陣痛促進剤を必要とすることがあります。使用する薬剤は胎児への影響がないと考えられるものを適切に使用します。麻酔導入し問題ないことを確認した後は、LDR 室内でできるだけ自由な姿勢で過ごしていただきますが、麻酔の影響で足に力が入らないこともあり、また尿意を感じないこともあるため、排尿は導尿にて行います。分娩後は通常の分娩と同様、カンガルーケアなどを行うことができます。

〔無痛分娩のメリット〕

硬膜外麻酔を使った無痛分娩では緊急帝王切開となったときに同じ麻酔法を使うことができます。骨盤の筋肉の緊張をとることができるので、難産道を柔らかくして、分娩の進行を助けます。

〔起こりうる合併症の可能性〕

1) 低血圧、徐脈、吐き気・嘔吐

この麻酔の影響で血圧が下がったり、脈拍が減少したりすることがあります。血圧や脈拍が極度に低下した場合には、心臓や脳に十分な血液を送り出せないことにより、吐き気がした

別紙 1

り吐いてしまうことがあります。その場合には直ちに点液を追加したり、薬を投与したりして対応します。

2) 呼吸抑制

胸や頸などの体の上の部分に麻酔が影響すると、呼吸に影響し、息が少し苦しいと感じることがあります。

3) 硬膜外チューブ挿入の際に、くも膜を損傷することによる広範な麻酔効果（呼吸抑制など）

4) 感染、出血、神経障害（尿意の消失なども含まれますが、多くは麻酔終了後に回復します）

5) 不十分な麻酔効果

以上の合併症は、早期発見により、ある程度回復可能なものがあります。そのため、当院においては無痛分娩にあたり、少量の水分摂取以外は絶食とし、点滴による血管確保、自動血圧計の装着、胎児心拍モニターで持続的に監視するなど母児管理を厳重に行い、異常の早期発見に努めます。

〔緊急時の対応〕

無痛分娩を施行している際でも、母児の状況によっては緊急で帝王切開が必要となる場合があります。また、分娩の進行状況が悪いときも帝王切開になることがあります。

上記内容を理解し、無痛分娩に

同意します

同意しません

_____年_____月_____日

患者氏名 _____

家族氏名 _____

つくばセントラル病院 産婦人科 説明医師 _____